

「自分の夫に従いなさい」

2005.7.31 赤羽聖書教会主日礼拝説教

21. キリストを恐れ尊んで、互いに従いなさい。

22. 妻たちよ。

あなたがたは、主に従うように、自分の夫に従いなさい。

23. なぜなら、キリストは教会のかしらであって、

ご自身がそのからだの救い主であられるように、夫は妻のかしらであるからです。

24. 教会がキリストに従うように、妻も、すべてのことにおいて、夫に従うべきです。……

33. 妻もまた自分の夫を敬いなさい。

説教

「酒に酔ってはいけません。そこには放蕩があるからです。御霊に満たされなさい。」(エペソ 5:18)

こう勧めた使徒パウロは、続く19節、20節で、聖霊に満たされた者は、「主に向かって、心から歌い、賛美し」(19)、

「いつでも、すべてのことについて、私たちの主イエスキリストの名によって父なる神に感謝しなさい。」(20)と勧めます。

私たちが神の御霊に満たされる時、私たちの中に起こる最大の変化は何でしょうか？

それは、イエスさまを知り、イエスさまを信じるようになる、ということです。イエスさまを知るとどうなるのでしょうか？イエスさまをあがめて、賛美します。それで、19節で使徒パウロがこう言うのです。「詩と賛美と霊の歌とをもって、互いに語り、主に向かって、心から歌い、また賛美しなさい。」

そして、その次にはどういうことになるのでしょうか？神さまに感謝するようになります。すべてのことに感謝できるようになります。これまで毎日が暗かった人も、イエスさまを知ると、私たちがこよなく愛してくださるイエスさまを知って感謝するようになります。私たちの身代わりに十字架に架かって死なれ、私たちの罪を贖ってくださった恵みを知って感謝するようになります。永遠のいのちを与えてくださった恵みに感謝するようになります。「いつでも、すべてのことについて、私たちの主イエスキリストの名によって父なる神に感謝しなさい。」(20)とあるように、これまでどんなに暗い人生を歩んできた人も、これまでどんなに暗く人生を歩んできた人も、イエスさまが自分に何にも代え難い永遠のいのちを与えてくださったという究極の希望をいただいたので、心から神さまに感謝するようになります。「いつでも、すべてのことについて……父なる神に感謝する」ようになります。これまで感謝できなかったことも、感謝できるようになります。人生バラ色に見えます。あのこともこのことも、とにかく人生すべてのことについて、父なる神さまに感謝するようになるのです。

そうして次にはどうなるのでしょうか？それが21節です。21. キリストを恐れ尊んで、互いに従いなさい。「キリストを畏れ尊んで、互いに従う」すなわち、私たちが愛し、私たちに永遠のいのちを与えて、今日も生かしてくださるキリストの恵みに心から畏れ入って、各々がキリストのみこころを行うようになると言うのでした。「従う」と訳されている言葉は、「下に、身を置く」という意味です。これは、権力者に対する国民の位置、あるいは主人に対する奴隷の位置といった、権力関係に於ける「下」の地位を意味します。相手よりも自分の身を低いところに置いて、相手に仕える者となるとか、相手の命令に聞き従うというような、しもべの生き様のことです。イエスさまは言われました(マルコ 10:42-45)。「あなたがたも知っているとおり、異邦人の支配者と認められた

者たちは彼らを支配し、また、偉い人たちは彼らの上に権力をふるいます。しかし、あなたがたの間では、そうでありません。あなたがたの間で偉くなりたいと思う者は、みなに仕える者になりなさい。あなたがたの間で人の先に立ちたいと思う者は、みなのおしもべになりなさい。人の子が来たのも、仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり、また、多くの人のための、贖いの代償として、自分のいのちを与えるためなのです。」

聖霊に満たされてキリストを知った者は、キリストのあまりの恵みの大きさに心から畏れ入って、高慢だった自分の身を低くして、相手に「仕える」者となるのです。人に仕えてもらう「王さま」になるのではなく、自分が人に仕える「しもべ」になるのです。イエスさまを知る前は高慢な「王さま」でしたが、イエスさまを知ってからはその恵みに畏れ入って「しもべ」になるのです。「互いに」すなわち「各々が、それぞれ」キリストのしもべとなって、妻は妻で、夫は夫で、子どもは子どもで、親は親で、「それぞれが」「各々」主人なるキリストのみこころを行うと言うのでした。

それでは、キリストのみこころとは何でしょうか。それが、続く夫婦関係(5:22-33)、親子関係(6:1-4)、職場関係(6:5-9)に記されたところの内容です。厳密に言うと、6:5-9の内容は「奴隷と主人」の関係ですので今日では無効な内容ですが、敢えて今日的に言えば、職場に於ける雇用関係に適用できる内容でもあると思いますので、職場関係ということにしておきましょう。これらの人々に向けられたキリストのみこころというものは、敢えて各々一言で表現するならば、妻は夫に従い、夫は妻を愛する、子どもは親を敬い、親は子どもを(主の教育と訓戒によって)正しく育てる、奴隷は主人に心から従い、主人は(神を畏れて)奴隷を正しく扱う、というようなものです。

また、ここでパウロが記述した、これら三者の順序も重要です。このパウロの記述によると、職場すなわち「仕事」の前に「家庭」があり、家庭の中でも「親子」関係の前に「夫婦」関係が優先されています。これが使徒パウロの考える、私たちの生活の優先順位であり、キリストのみこころにある私たちの人生の優先順位です。つまり、仕事よりも家庭です。仕事よりも家庭が大切なのです。そして、その家庭に於いては、「親子」の関係よりも「夫婦」の関係が大切です。言い方を変えるなら、夫婦があって親子があり、家庭があって仕事があるということです。この反対、この逆の優先順位は、キリストのみこころではありません。つまり、家庭よりも仕事を優先することは、キリストのみこころではないのです。そして、親子の関係を夫婦よりも優先することは、キリストのみこころではないのです。仕事よりも家庭、親子よりも夫婦、これが聖書の教える優先順位です。

そこで、今日は、特にパウロが最初に挙げている、妻の役割について共にみことばから学びましょう。22.妻たちよ。あなたがたは、主に従うように、自分の夫に従いなさい。この直訳は、「妻たちは、主に対するように、自分の夫たちに。」です。ここに「従いなさい。」という言葉はありませんが、その前の節の「互いに従いなさい」を受けているものと思われます。「主に対するように」とは、

(同じ表現が6:7の「奴隷」に関しても使われていて、それを参考にすると、)

「人のご機嫌とりのような、うわべだけの仕方ではなく、

キリストのしもべとして、心から神のみこころを行い、

人ではなく、主に仕えるように(主に対するように)、善意をもって仕えなさい。」(6:6-7)という意味です。

それは、自分がキリストを「恐れ尊んで」、感謝と喜びをもってキリストのみこころを行っているように、ちょうどそのように、妻が自分の夫を「恐れ尊んで」、感謝と喜びをもって夫に従うということになるでしょう。

初代教会の信者たちは、いのちがけで主に仕え、主に従いました。自分たちが永遠のいのちをいただいた喜びと感謝をもって、精一杯主のみこころを行ったのです。

「妻たちは、主に対するように、自分の夫たちに。」とは、そのように「自分の夫に対するように」と言うのです。自分がキリストを「畏れ尊んで」、感謝と喜びをもってキリストのみこころを行っているというのなら、それと全く同じように、妻は自分の夫を「畏れ尊んで」、感謝と喜びをもって夫に従いなさい、と使徒パウロは言うわけです。

ここでは、「主に仕える」ことと「夫に仕える」ことは決して矛盾していません。よく、自分の信仰生活と家庭生活の両立は難しいという人がいます。確かに、現実の家庭生活に於いては様々な霊的な葛藤なり闘いというものがあることは事実です。信仰生活は、すなわち闘いの日々だとも言うことができるでしょう。しかし、少なくとも、ここでは、すなわち使徒パウロにとっては、「主に仕える」ことは「夫に仕える」ことです。「主に従う」ことは「夫に従う」ことなのです。「妻たちは、主に対するように、自分の夫たちに。」とは、信仰生活と家庭生活は別々のものではないということです。むしろ、毎日の家庭生活は、すなわち私たちの信仰生活なのです。こうして日曜日に教会に来ることだけが信仰生活なのではなくて、私たちが毎日生活している日常の平凡な日々こそが実は信仰生活なのです。

22 .妻たちよ。あなたがたは、主に従うように、自分の夫に従いなさい。それでは、その理由は何でしょうか。どうして妻は、「主に対するように、自分の夫たちに」向かえと使徒パウロは言うのでしょうか。

それは、「夫は妻のかしらである」からです。23 .なぜなら、キリストは教会のかしらであって、ご自身がそのからだの救い主であられるように、夫は妻のかしらであるからです。これによると、キリストは、私たち、すなわちキリストのみからだなる教会の「救い主」であられ、教会の「かしら」であられると言います。同じエペソ書の2章の表現を借りて言えば、私たちは、自分の罪の中に死んでいました。悪魔の惑わしに対して手も足も出ない、ひたすら悪魔の言いなりに罪を犯して、そのままでは神さまの燃える怒りを受けて、永遠の滅びに投げ入れられて然るべきでありました。しかし、そのような私たちの身代わりとなり、イエスさまは十字架で死んで私たちの罪を贖い、私たちに永遠のいのちを与えてくださったのです。そうやって、(私たちのいかなる罪にも功績にもよらず)ただ恵みによって、私たちが罪と滅びから救い出してくださいました。キリストこそ私たちのまことの「救い主」であられます。であるからこそ、キリストによって救われた私たちは、「キリストを畏れ尊び」、喜びと感謝をもって、かしらなるキリストに仕えることができるのです。

そのように、夫は、(これはまた来週学びますが、)自分の妻のために死んで、いのちを捨てて、自分を殺して、妻を「愛し」、「清め」、「養い育て」というのがパウロの教えです。そうして、その夫の愛に心から畏れ入って、妻は「自分の夫」に従うようになります。しかも、心から、感謝と喜びをもって「自分の夫」に従うようになるのです。24 .教会がキリストに従うように、妻も、すべてのことにおいて、夫に従うべきです。この直訳はこうです。「それで、教会がキリストに従っているように、そのように、すべてのことに於いて 女たちは男たちに。」ここでも訳では「従うべきです」とありますが、原文では、「教会がキリストに従っている」とはあっても、「女たちは男たちに」従えとは言われていません。ですから、「教会がキリストに従っているように、そのように、すべてのことに於いて女たちは男たちに」「従え」とも訳せるし、「従った方が身のためだ」とか、「従えば、祝福があるよ」とか、「従うことが、キリストのみこころだ」「従う人生はすばらしい」等々....要するにいかようにも訳せるのです。いずれにせよ、妻が夫に従うことは、命令形ではなく、それがキリストのみこころにかなう人生なのだという「教え」なのです。そして、それは、夫が妻を愛することに基くことです。つまり、キリストが、私たちのためにご自身のいのちを捨てて私たちの魂を地獄の滅びから救ってくださった、そのことにより、救いの恵みを受けた私たちは、感謝と喜びをもってキリストに従っているように、ちょうどそのように、夫から愛されている喜びと感謝をもって、妻は心から喜んで夫に従うようになるというのです。そして、それがキリストのみこころです。キリストが喜ばれることです。キリストが、すべての妻たちに願っておられることです。

24. 教会がキリストに従うように、妻も、すべてのことにおいて、夫に従うべきです。先にも述べましたが、「教会がキリストに従う」の「従う」とは、「下に身を置く」という意味です。権力者に国民が服従するとか、奴隷が主人に服従するといったような明確な権力関係の「服従」を意味します。相手よりも自分の身を低いところに置いて、相手に服従するのです。私たちは、どうしてパウロがこう教えているのか、その背景を考えてみる必要があると思います。使徒パウロは、どうして女が「自分の夫に従う」ことを教えているのでしょうか。それは、女というものの一般が、自分の夫に従うことを良しとしない傾向があるからです。つまり、妻に、自分の夫に従うように教えているのは、妻が夫に従わないからです。

これは、最初の人間アダムとエバの時代からそうです。もともと神さまに背く前は、エバは、アダムの「助け手」として、アダムに従って生活していましたが、蛇に惑わされてからは、つまり悪魔に惑わされてからは、エバがアダムを従えるようになってしまったのです。そして、「食べてはならない」と神さまに命じられていた「善悪の知識の実」を取って食べ、自分の夫にも与えたのです。それで、神さまは、アダムを叱責なさる時に、こう言われました。(創世記 3:17-19)「あなたが、妻の声に聞き従い、食べてはならないとわたしが命じておいた木から食べたので、土地は、あなたのゆえにのろわれてしまった。あなたは、一生、苦しんで食を得なければならない。土地は、あなたのために、いばらとあざみを生えさせ、あなたは、野の草を食べなければならない。あなたは、顔に汗を流して糧を得、ついに、あなたは土に帰る。あなたはそこから取られたのだから。あなたはちりだから、ちりに帰らなければならない。」

神さまは、「あなたが、妻の声に聞き従い」と、夫が神さまの命令よりも妻の声に聞き従ったことを責められたのでした。この点に於いて、使徒パウロは、テモテ書に於いて、「女は惑わされてしまい、あやまちを犯した」と言いました。

夫はあくまで妻の声でなく神のことばに聞き従って生活すべきでした。そして、妻は、神に聞き従う夫に聞き従って、これまた生活すべきでありました。これが、神さまの定めた家庭の秩序です。それは、神 - 夫 - 妻、そして、子どもたち、これが神の定めた家庭の秩序というものです。それなのに、妻が、夫の前に身を低くせず、高慢にも夫の上に君臨しようとしたら、どうでしょうか？夫を支配しようとしたら、どうなるでしょうか？夫を自分の尻の下に敷こうとしたら、どうなるでしょうか？「これを食べなさい」と、夫を神に反逆させるよう、罪に誘惑することになるのです。妻が夫の前に身を低くしないと、夫も神の前に身を低くせずに、神に背くようになるのです。

だから、妻の役割というのは極めて大きいと言えます。夫を墮落させることもできるし、夫を栄えさせることもできるのです。そして、夫を墮落させるか栄えさせるかの分岐点は、「夫に従うか否か」です。

夫に従えと言われると、うちの夫はだらしなくてとても従えたもんじゃなかったか、うちの夫はいい加減で無責任でふがないから、そんな夫には従えないという人もいるかも知れません。でも、夫をそのような無責任な男にしたのは、妻の責任も大きいと思います。つまり、妻が夫に従わないからです。

従えば、夫がすべての責任を負わねばなりません。でも、妻がいつも反対して、夫に逆らってばかりいたら、うまくいかない時「ほら見る、お前が余計なこと言うから」となるし、妻がいつも夫の言うことに反対してばかりいたら、どうせ自分の言ったことはあてにされないと、夫がいい加減なことを言ったり、無責任な行動をするようになるんです。子どもが親の言うことを聞かないというのも、妻が夫の言うことを聞かないから、そうして子どもに模範を示さないから、だから子どもも親をバカにするようになるんです。いつも妻が夫の言うことをよく聞いて、夫は一家の主人だ^{あるじ}ということを示していたら、子どもも父親の言うことをよく聞くようにな

るんです。いつも妻が夫を足蹴にして、父ちゃんのようになるなど夫をバカにしているのに、そんな親の言うことを誰が聞くでしょうか？

夫の意見に反対したり、自分の意見を言ってもいいけれど、その言い方があります。妻は妻として、言うべきです。自分の位置をよくわきまえて、言うべきです。夫の「助け手」としての自分の位置をわきまえて、言うべきです。「主人」としてではなく、「助け手」として、言うべきです。「上」からでなく、「下」から、言うべきです。それが、パウロが言う「下に身を置く」の意味です。

それで、パウロは言います。

2 2 . 妻たちよ。

あなたがたは、主に従うように、自分の夫に従いなさい。

2 3 . なぜなら、キリストは教会のかしらであって、

ご自身がそのからだの救い主であられるように、夫は妻のかしらであるからです。

2 4 . 教会がキリストに従うように、妻も、すべてのことにおいて、夫に従うべきです。

「すべてのことに於いて」の別訳は「万事に於いて、あらゆることに於いて、どんなことに於いても、あらんかぎり、1 つも欠けが無く」です。勿論、神さま以上に夫を愛する必要はありません。ですから、罪を犯すことになるような、十戒に背く命令を夫がしたら、それには従ってはならないし、むしろそれには面と向かって反対すべきです。抵抗権があります。しかし、それ以外は、すなわち神に背くことになるような命令以外には、夫に従う、ということが神さまのみこころなのです。

2 2 . 妻たちよ。

あなたがたは、主に従うように、自分の夫に従いなさい。

2 3 . なぜなら、キリストは教会のかしらであって、

ご自身がそのからだの救い主であられるように、夫は妻のかしらであるからです。

2 4 . 教会がキリストに従うように、妻も、すべてのことにおいて、夫に従うべきです。……

ここに集われたみなさんひとりひとりが、みことばの通りに生きて、神の栄光をあらわす良き家庭を築いていかれるよう、そして、この祝福を私たちの子どもたちに残していくことができるよう、主の御名により祈ります。